

3. 梅津の地名について

京都の梅の名所では、北野天満宮が有名だが、右京区の梅宮大社には550本といわれる梅が植わっていて「梅津」という一帯の地名の由来になっているという。

「梅津」については、もうひとつ説があります。

桂川の土砂が一带を埋めた津「埋め津」という話です。保津峡から嵐山へ出た桂川の流れは東流したあと南に向きを変え、ひらがなの「し」の字を描くようにカーブしている。

その「し」の字カーブ内側の一帯が梅津です。

低地なのが特徴で、地図を見ると嵐山の渡月橋の北詰が海拔37メートルに対して、梅津では29メートルしかなく、となりの桂川の河原とほぼ変わらない。

川の土砂が埋まってできたという説明があります。

さらに梅津のなかに「罨原（ふしはら）町」という地名もあり。

「罨」は、水の中に木の枝などを沈めて魚を捕る柴漬け漁の柴のことをいいます。漁ができるワンド（湾処）とか池があったとしてもおかしくありません。

「埋め」と「梅」。ごろ合わせのような、地名の二説です。

ここでは低地に梅が咲いているので、二つの説が融合しているのでしょうか。

梅宮大社の所在地

梅宮大社の所在地は、梅津フケノ川町30ということで、わき水があったんじゃないかと思わせる地名です。

フケノ：「泓ノは、深草南部、棒鼻に近い所、フケ（深田（ふけだ））に泓の字を当てているが、辞書によると、泓の字にはフケの訓音はない、フカシ、フチなどで、水の広く深いの意味。

梅宮大社庭園の池

梅宮大社は、庭園の池の水が豊富です。

やはり桂川近くの低地という地の利が活かされた庭園だと思われます。

